HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ニヴフ語の複数表示 ： ポロナイスク方言の-gun の特殊用法
Author(s)	丹菊, 逸治
Citation	北方人文研究, 5, 113-122
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49285
Type	departmental bulletin paper
File Information	08journal05-tanngiku.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ニヴフ語の複数表示
―ポロナイスク方言の-gun の特殊用法―

丹菊逸治
北海道大学アイヌ・先住民研究センター

１．はじめに

ニヴフ語サハリン北部方言[1]の複数表示は動詞連用形の人称・数との一致、オプショナルな複数表示接尾辞-gun などによる。-gun は動詞接尾辞としては主語の複数性を表示する。ポロナイスク方言もほぼ同じであるが、目的語の複数性を表示する用例がわずかにみられる。本稿ではその現象に、隣接するアイヌ語サハリン方言からの影響が考えられることを指摘する。

ニヴフ語の複数表示については、アムール方言・サハリン北部方言ともにそれぞれ Panfilov(1962)・(1965)、Gruzdeva(1998)などですでにまとめられている。本稿の記述は基本的にこれらにもとづく。なお、両方言は現在でも調査が可能である[2]。ポロナイスク方言もほぼ同じ複数表示を持つことが高橋盛孝(1932)および服部健(1934)で指摘されているが、同方言は話者の減少により現在では調査が困難である。アイヌ語サハリン方言の複数表示にかんしては服部四郎(1961)、村崎恭子(1979)の記述がある[3]。

２． ニヴフ語サハリン北部方言の連用形接尾辞

ニヴフ語サハリン北部方言において複数を表示する主な手段は 2 つある。1 つは連用形接尾辞の人称変化である。

	単数	複数
1 人称	-t	-t
2 人称	-r	-t
3 人称	-r	-t

連用形接尾辞（短形）

	単数	複数
1 人称	-tot	-tot
2 人称	-ror	-tot
3 人称	-ror	-tot

連用形接尾辞（長形）

[1] ニヴフ語はサハリン島およびアムール川河口地域を伝統的居住地域とする人口およそ5000人ほどの少数民族、ニヴフ民族の固有言語である。この言語はサハリン島北部東海岸で話されるサハリン方言、大陸側アムール川河口地域およびサハリン島北部西海岸で話されるアムール方言に大別される。アムール方言にはシュミット方言をはじめいくつかの下位方言がたてられる。本稿で扱うサハリン方言はトゥミ川流域および北部海岸で話される下位方言（以下サハリン北部方言と呼ぶ）と、ポロナイ川流域で話されていた下位方言（以下ポロナイスク方言と呼ぶ）に分かれる。隣接する言語としては、サハリン島北部でツングース系のウイルタ語およびエベンキ語、サハリン島南部でアイヌ語サハリン方言、アムール地方でウリチ語があげられる。

[2] 本稿で注記のないニヴフ語サハリン北部方言の例文は丹菊逸治・パクリナ編(2008)による。

[3] この方言は話者の減少により現在では調査がほぼ不可能である。

1 人称単数および複数・2 人称複数・3 人称複数では-t であり、2 人称単数・3 人称単数のみ-r となる。長形-tot, -ror は完了強調形であり、同じように人称変化する。つまり人称変化といっても 2 種が交替するだけで「2・3 人称単数で単数形に変化し、1 人称においては単数でも変化しない」というものである[4]。

連用形接尾辞は主語がある場合は主語の数に一致する。

(1) ŋiv-gun　q'ocu -ʁar' -t,　in-xer-di　-qavr -ʁar'-d.
human-PL　silent-PRF-CV:3pl,　3pl-tell-INT　-NEG-PRF-FIN
「人々は黙りこくって、彼らに話しかけもしなかった。」

この言語では主語の表示が義務的ではないので、2・3 人称で主語が明示されていないときには連用形接尾辞が単複の区別の機能を持つ。また、連用形は終止形の代わりに文末にくることがある。

(2) nud　vaŋ　lu　nud　lu,　k'lə　si　-t　hundʲi-t.
what　pot　INTER what　INTER,　sky　lay-CV:3pl　put-CV:3pl
「(彼らは) 鍋でも何でも、天空に安置して、おいた。」

(3) haj,　r'aŋs　pər'k　jaj-d　lo?
INTERJ　how　only　make-FIN　INTER
「さて、どれだけ作ったのか？

aj,　ror'-ror'　jup-ror　xici-r'　vap-r'　vi-d.
INTERJ　bundle-CV:3sg　tie- CV:3sg　lift-CV:3sg　carry-CV:3sg　go-FIN
さて、彼は束ねて縛ってから持ち上げて運んで行った。」

連用形接尾辞の一致は後述する-gun と異なり義務的である。以下(4a)～(4d)および(6)は 2004 年の調査時に得られた。ニヴフ語サハリン北部方言話者ナジェージダ・タンジナ氏のご教示による。

例：k'er'qo-「魚を釣る」
(4a) niv-gun　k'er'qo-t　vi-d.
human-PL　fish-CV:3pl　go-FIN
「人々が魚を釣りに行った。」

(4b)×niv-gun　k'er'qo-r'　vi-d.
human-PL　fish-CV:3sg　go-FIN

(4c) niv-gun　k'er'qo-d-ɣun.
human-PL　fish-FIN-PL

[4] 風間伸次郎(2009)では、かつて 1／2／3 人称と単／複によるマトリクスをそなえたパラダイムが存在していたものが、変化形の合流・衰退によって現在の形になったと推論している。

「人々が魚を釣った。」

(4d) niv-gun　　k’er’qo-d.
　　human-PL　　fish-FIN
「人々が魚を釣った。」

連用形接尾辞は服部健(1934)、風間伸次郎(2009)で指摘されているように複文における指示転換の機能を持つ。短形-r/-t は主節と従属節の主語の異同を許すが、長形（完了強調形）-ror/-tot では主語が同一でなくてはならない。

(5)　c’i　pxu-r’　　ni　　wi-t.
　　2sg　return-CV:3sg　　1sg　　go-CV:1sg
「お前は帰ったし、私は行った。」服部健(1934)
（表記・訳は丹菊が修正）

(6)　×　ni　　nadnə-tot　　c’i　　p’r’ə-d.
　　1sg　　work-CV:1sg　　2sg　　come-FIN
「私が仕事を終えてからお前が来た。」

３．　ニヴフ語サハリン北部方言の複数表示接尾辞–gun

連用形以外の複数表示手段として複数表示の接尾辞-gun（およびその異形態/-kun/-ɣun/-xun）がある[5]。-gun は名詞句に接尾して複数性を表示し、動詞に接尾して主語の複数性を表示する。名詞（可算名詞）が複数の場合は義務的に付加される。動詞の場合はオプショナルである。以下の(7a)～(7c)、(8a)～(8d)、(11a)～(11d)は 2011 年の調査時に得られた。ニヴフ語サハリン北部方言話者であるヴラディミル・サンギ氏のご教示による。

qanŋ「犬（単数）」
qan-gun「犬（複数）」（いくつかの名詞の語末の ŋ は接尾辞が付く際に脱落する）

複合名詞において被修飾名詞は後置されるが、-gun はその後に接尾する。修飾する側と修飾される側の名詞の双方に-gun が接尾してもよいが、サンギ氏によればあまり好ましくないという。つまり(7a) (7b)どちらの表現も可能であるが(7b)はあまり好ましくないという。

(7a) qan-coŋr’-kun
　　dog-head-PL
「『犬の頭』（複数）」（犬がたくさんいて、その結果、犬の頭もたくさんあることを示す）

(7b) qan-gun-coŋr’-kun
　　dog-PL-head-PL
「『犬（複数）』の『頭（複数）』」

[5] 先行する名詞句・動詞句の末尾子音によって頭子音が変化する。

所有者を複数、被所有者を単数にはできない。

(7c) × qan-gun-coŋr’
dog-PL-head
「『犬（複数）』の頭（単数）」

サンギ氏によれば(7c)は通常は駄目だが「犬がたくさんいて、一つの頭を共有している」というありえない状態を意味するなら可能だという。

cf. ただし aw「声」など非可算名詞ならば次のような表現が可能である。

(7d) milk-xun aw
monster-PL voice
「『化け物（複数）』の声」

名詞接尾辞としての-gun は義務的だが、動詞接尾辞としての-gun は義務的ではない。したがって名詞のみを複数形にして動詞を単数形のままにしておくこともできる。ただし、名詞を単数形のまま動詞を複数形にすることはできない。名詞の複数表示は義務的である。

(8a) qanŋ　ve-d.
dog　go-FIN
「犬（単数）が通った。」

(8b) qan-gun　ve -d -ɣun.
dog-PL　go-FIN-PL
「犬（複数）が通った（複数）。」

(8c) qan-gun　ve-d.
dog-PL　go-FIN
「犬（複数）が通った。」

(8d) × qanŋ　ve-d-ɣun.
dog　go-FIN-PL
×「犬（単数）が通った（複数）。」

他動詞においては主語の複数性を表示する（目的語の複数性ではない）。

(9) axsik　kuz-t　naf　c’am　ŋa-d-ɣun.
all　leave-CV:3pl　now　shaman　seek-FIN-PL
「みんな外へ出て（複数）シャマン（単数）を探した（複数）。」

(10) vi-r’　in　vo-r,　in　xu-r-a-d furu,　hu milk.
go-CV:3sg 3pl　catch-CV:3sg　3pl　kill-PAST-FIN　this monster

「行って彼らを捕まえて、彼らを殺してしまったものだそうだ、その化け物は。」

金子亨(2010)はアムール方言について「全体が一緒に行動しているときには複数表示になることが多いように見える」としている。これはサハリン北部方言についても同じであり、また同方言の話者も同じように説明する。一方、Gruzdeva(1998)などで指摘されているように動詞の語幹重複は動作の多回性を表す。両者は共起することができる。

(11a)　ɲivŋ nen juɣ-d.「一人の人が入った。」
(11b)　ɲiv-gun juɣ-d-ɣun.「たくさんの人が一つの場所に入った。」
(11c)　ɲivŋ nen juɣ-juɣ-d.「一人の人が出たり入ったりした。」
(11d)　ɲiv-gun juɣ-juɣ-d-ɣun.「たくさんの人が出たり入ったりした（それぞれの場所にばらばらと入った）。」

以上みたように、ニヴフ語サハリン北部方言においては、連用形接尾辞の義務的な表示とそのほかオプショナルないくつかの手段（人称代名詞、複数接尾辞-gun、動詞語幹重複）によって複数表示・多回表示が行われている。

４．ポロナイスク方言における-gun の特殊例

以上みたように-gun は動詞の主語の複数性を表示するが、高橋盛孝(1932)によればポロナイスク方言では目的語の数と一致する例があるという。服部健の未刊資料にも目的語の複数性が表示されていると思われる例がある（いずれも表記・訳は丹菊が修正したもの）。

(12a)　keoχat　je-ɲŋaχ　paʁsir'　ŋaɣ　muɣf　ʃuv-nd.
　　Keoχat　3sg-eye　half　six　day　pluck-FIN
　　「ケオハト（人名）はそいつの片目を 6 日かけてえぐりだした。

(12b)　meqr'　ɲŋaχ　mχoχr'　migrʃk　ʃuv-nd-ɣun.
　　two　eye　ten　two　pluck-FIN-PL
　　両目を 12 日かけてえぐりだした[6]（複数）。」高橋盛孝(1932)

(13a)　t'ər-ŋa　ʃaŋɢ　c'χar'　sanka　wanu-r'　hunbu-nd.
　　see-CV　woman　wood　many　pile-CV:3sg　stay-FIN
　　「女性が見ると薪がたくさん積み重ねられてあった。」

(13b)　ha-r'　hun　əsk-xin　ro-r',　hun　ʃaŋɢ　c'χar'　daf　-toχ　juʃku-nd-xun.
　　do-CV:3sg this　flatfish-COM help-CV:3sg this　woman wood house-DAT　carry-FIN-PL
　　「それからそのカレイを手伝って、この女性は薪を家に運び込んだ。」
　　（北海道立北方民族博物館所蔵　服部健ノート）

(12a)(12b)はひと続きの 2 文である。一連の文章の主語は「ケオハト」という一人の男性で

[6] 高橋盛孝(1932)の注釈によれば ʃuv- 「抜き出す」は他方言の səw-に対応する語である。「ケオハトが目をえぐりだした」という解釈は正しいと思われる。

あり、動詞が複数におかれているのは主語との一致ではない。高橋盛孝(1932)によればこれは目的語の「両目」という複数に一致しているという。(13a)(13b)もひと続きの 2 文である。問題は 2 文め(13b)のほうであるが、まず、この文には方言差によるものか、サハリン北部方言のとしてみると解釈がしにくい部分がある。サハリン北部方言の文であれば-xin は不要と思われる。他動詞 ro-「手伝う」に随伴格表示-xin は不要である。また-xin が「カレイと女性」を表すためにはA-xin　B-xin のように繰り返される必要がある。ポロナイスク方言でこの文がなぜ許容されるのか問題は残るが、高橋盛孝(1932)の指摘しているような「目的格との数の一致」を含んでいる例ではある。2 文目従属節の「手伝って」の部分は 3 人称単数形になっており、主節「運び込んだ」の主語は「この女性」になっている。サハリン北部方言であれば 8(d)と同様に後半部が非文になるはずである。(12b)と同様に「運び込んだ」の複数表示が前文の「積み重ねられてあった」複数の薪を指示している（-gun は目的語と一致している）のであろう[7]。

あるいはこれら(12b)(13b)の例はそのような現象ではなく、たんに多回性を表すものかもしれない。サハリン北部方言と異なりポロナイスク方言の-gun に多回性表示の用法があるならば、(12b)は「12 日かけて何度も何度もえぐり出した」、(13b)は「薪を何度も家に運び込んだ」ということになるであろう。だがポロナイスク方言でもサハリン北部方言同様に動詞語幹重複による多回性表示がみられ、一方で-gun が複数動作主の動作の同時性を表す表現でしばしば用いられている。こうしたことからはポロナイスク方言の-gun に多回性表示があるとは今のところは考えにくい。とすればやはり(12)、(13)の例では目的語との一致という可能性が考えやすい。そしてこのように目的語の複数性が動詞側の接辞で表される現象は、隣接するアイヌ語にみられるものである。

５．アイヌ語サハリン方言の複数表示接尾辞-hci/-ahci, -hcin/-ahcin

田村すゞ子（1997）によれば、アイヌ語北海道方言では多回性は基本的に動詞語幹重複で表される。だが、同時に複数回の動作が行われる場合はいわゆる複数形が用いられるために、他動詞の単複が目的語の数と一致することが多いのだという。oputuye「一人を押す」oputuypa「二人以上を押す」の例があげられている。アイヌ語サハリン方言では-pa を用いた動詞複数形は少なく、-hci という複数接尾辞が用いられる。-hci にかんしては限定的ではあるが、同じような現象がみられる。

(14) haciko　orowano　ku-ommoho　naa　haciko　orowano　yuhpo-yuhpo-ho-hcin　naa
childhood　from　1sg-mother　also　childhood　from　brother-brother-POS-PL also
「幼少時から私の母も、幼少時から兄も

okore　unkayoh　acahcipo　taa　okore　rayki-hci　ike　e-hci　SHITE...
all　monster　grandmother　INT　all　kill-PL　CONJ　eat-PL　CONJ
みんな化物ばあさんがみんな殺して食べてしまって…」村崎恭子(2001)

[7] 後半部の主語が「カレイと女性」という複数だと解釈するのは困難だと思われる。連用形の短形で結ばれた「それからカレイを手伝って」と「この女性は薪を家に運び込んだ」の独立性は高くそれぞれ別の主語を用いることができる。したがって前者の主語にカレイが含まれなくとも、後者の主語が「カレイと女性」になることは可能である。ただし、その場合には ʃaŋɢ -gun とするか、əsk-xin hun ʃaŋɢ-ɣin のように-xin(あるいは異形態-ɣin)を 2 回含んでそれぞれが明示されなくてはならないと思われる。

村崎恭子(1979)では複数表示-hci について、主語・目的語どちらが複数のときにも用いられるとしている。だが、目的語の数に一致して複数になる動詞は rayki「殺す」ee「食べる」のほかには一部の使役動詞だけのようである。

(15) ku-koro the taranoka aynu utara ku=kon-te-hci kusu nah ku-ramu-hu.
1sg-have CONJ those human PL 1sg-have-CAUS-PL CONJ CONJ 1sg-think-INT
「私が買ってあの人たちにあげようと思う。」村崎恭子(1979)

これらは基本的に多回形・使役形と解釈することができる。(14)では長期にわたって繰り返されたできごとである。(15)も使役形で数は動作主に一致していると解釈できる[8]。だとすると目的語の数との一致はあくまで結果的なものである（ニヴフ語サハリン北部方言では今のところこのような例でも見つかっていない)。

所有表現においてはより主要部標示的な現象がみられ、被所有におかれた名詞につく接尾辞-hcin/-ahcin は所有者あるいは被所有者（物）のどちらの複数性も示す。

(16) nean hence uta mahpoo-ho-hcin ampene nean kosmahneoman ampene etunne.
this randfather PL girl-POS-PL very this marry very refuse
「そのじいさんたちの娘は結婚を強く拒んだ。」村崎恭子(1976)

(17) ICHIBAN kiyanne monimahpo taa niina,
most older woman INT gather-firewood,
「最年長の姉が薪を集めた、

heekopo-ho-hcin ampene etoranne-hci kusu,...
sister-POS-PL very neglect-PL CONJ
（彼女の）妹たちは完全に怠けていたので,..」村崎恭子(2001)

-hcin は所有表現に限定される複数表示だが、「おじいさんたちの娘」でも「彼女の妹たち」でも同じように接尾している。動詞接尾辞は-hci、名詞接尾辞は-hcin であり、語形に差異がある。ただし実際に録音資料を聞くと動詞接尾辞でも-hcin と発話されている場合があり、知里真志保（1932）にある「尚この-si, -ci は-sin, -cin の形でも聴かれる」という記述と一致する[9]。

６．ニヴフ語ポロナイスク方言の-gun の特殊用法の起源

ニヴフ語ポロナイスク方言の動詞接尾辞-gun が主語でなく目的語と一致する例はアイヌ語-hcin と類似する。ニヴフ語の他の方言では今までのところこのような現象について報告がない。また、アイヌ語の名詞接尾辞-hcin は被所有者の複数性を表しうるが、名詞接尾辞として

[8] pooho-hcin kira-re-hci「子どもたちを逃がした」（主語は単数）などのように複数接尾辞が使役語尾の後につく形態素配列は、北海道方言 kor-pa-re「（複数に）与える＜持たせる」とは異なっている。

[9] 北海道方言にも生産性は低いものの、複数表示の動詞語尾-ci が存在する。奥田統己(1999)では「動詞に後続して主語または目的語が大勢であることを表す」としており、名詞には接尾しないようである。

の-gun にそのような例はないようである。

ニヴフ語の複数表示の動詞接尾辞-gun とアイヌ語の複数表示接尾辞-hci は機能が異なるが、ともにオプショナルである[10]。特にニヴフ語においては多くの場合に連用形接尾辞-r/-t が単複を表示してしまうために、動詞接尾辞としての-gun はむしろ「複数の動作の同時性」のマーカーとして機能している。ポロナイスク方言は隣接するアイヌ語の影響を受けて、動詞における従属部表示的な傾向が弱まり、目的語の複数性表示という主要部標示的な機能を取り込んだのではないかと考えられる。ニヴフ語の所有表現においては所有者のみとの一致が義務的であることから、アイヌ語サハリン方言の主要部標示的な所有表現の影響を受けることがなかったのであろう。

背景として考えられるサハリン島におけるアイヌ語とニヴフ語の接触の影響はもちろんもっと広範囲だった可能性がある。アイヌ語において、-hci(n)のように動詞接尾辞と名詞接尾辞が同じ形式をもつという現象自体は北海道方言よりサハリン方言に顕著である。サハリン方言においては被所有形に関連する別の部分でも動詞接尾辞と名詞接尾辞が同じ形式になっていて、動詞の名詞化接尾辞と名詞の被所有形接尾辞がともに-haa/-hee/-hii/-hoo/-huu である。北海道方言の名詞の被所有形語尾はサハリン方言とほぼ同じ ha-/-he/-hi/-ho/-hu であるが、サハリン方言の名詞化接尾辞に類似する形式名詞 hi には母音交替形がなく、同じ形式とはいえない。また、アイヌ語サハリン方言には（アイヌ語としては）奇妙な敬意表現がある。アイヌ語北海道方言・サハリン方言とも、2 人称複数が敬意表現として用いられるが、服部四郎(1961)によればサハリン方言では 1 人称複数形も話し相手に対する敬意表現となる。ニヴフ語の連用形の人称変化パラダイムは 1 人称複数が 1 人称単数に代わって用いられるようになった結果としても成立しうる。アイヌ語サハリン方言の 1 人称複数による敬意表現はその影響なのかもしれない。今回とりあげたポロナイスク方言の現象がアイヌ語からの影響だとしても、逆方向の影響も当然ありうるからである。ニヴフ語の複数表示-gun（サハリン諸方言）-gu（アムール諸方言）以外に動詞と名詞双方に同じ形式でつく接辞が多いわけではないが、高橋盛孝(1932)によればポロナイスク方言ではほかにもいくつかの接辞が動詞・名詞双方につくという。この分布からはアイヌ語とニヴフ語の接触地域にみられる現象のようにもみえる。

サハリン島は複数の民族が交錯してきた地域である。とくにポロナイスク方言の分布域では過去数百年間でアイヌ、ウイルタ、ニヴフの 3 民族の交替が激しかった。そのうちニヴフ民族は比較的新しく移住してきたと考えられており、人口も 100 人ほどにすぎなかった。かつて東西両海岸においてアイヌとニヴフ両民族の間に婚姻関係があったことが口頭伝承として語られているが、ポロナイスクには東西各地域でアイヌ民族と婚姻関係にあった集団からの移住者も多かった。その元の集団はその後ソビエト連邦時代の集住化政策によって現在のサハリン北部方言集団に合流してしまっている。ポロナイスク方言の資料はあまり多く残されていないが、サハリン島の言語接触を考えるうえでは貴重である。

[10] 村崎恭子(1979)によれば名詞接尾辞-hcin は義務的であり、この点でもニヴフ語の-gun と同じである。服部四郎(1932)によれば主語が 3 人称複数のとき動詞接尾辞-hci は義務的であり、ニヴフ語の-gun とは若干異なる。

略号

COM　随伴格	FIN　終止形接辞	NEG　否定助動詞	CAUS　使役接辞
CONJ　接続詞	INT　強調詞	PL　複数表示接辞	PAST　過去助動詞
CV　連用形接辞	INTER　疑問詞	PRF　完了形接辞	
DAT　与格	INTERJ　感動詞	POS　被所有接辞	

参照文献

奥田統己 編
1999『アイヌ語静内方言文脈つき語彙集』札幌学院大学
風間伸次郎
2009「ニブフ語と近隣諸言語との類型的異同・言語接触について」『サハリンの言語世界』津曲敏郎 編　北海道大学大学院文学研究科
金子　亨
2010「ニヴフ語動詞の語形成」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』第 12 号　千葉大学ユーラシア言語文化論講座
高橋盛孝
1932『樺太ギリヤク語』大阪朝日新聞
田村すゞ子
1997「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典セレクション　日本列島の言語』三省堂（初出　『言語学大辞典　世界言語編上あ〜こ』三省堂　1988 年)
丹菊逸治・パクリナ 編
2008『フトククさんの昔話と体験談』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
知里真志保
1932「アイヌ語法研究　樺太方言を中心として」『樺太庁博物館報告』第 4 巻　第 4 号　樺太庁博物館（『知里真志保著作集第 3 巻』　平凡社　1973 年）
服部四郎
1957「アイヌ語における年長者層特殊語」『民族学研究』21 巻 3 号　日本民族学会
1961「アイヌ語カラフト方言の「人称接辞」について」『言語研究』39 号　日本言語学会
服部　健
1934「ギリヤーク」『服部健著作集』（北海道出版企画センター　2000 年）
未公刊ノート　北海道立北方民族博物館蔵
村崎恭子
1976『カラフトアイヌ語』　国書刊行会
1979『カラフトアイヌ語　文法篇』　国書刊行会
2001『浅井タケロ述　樺太アイヌの昔話』　草風館
Gruzdeva, E.
1998　*Nivkh* (Languages of the World Materials 111), Lincom Europa.
Panfilov, V.
1962　*Grammatika nivxskogo jazyka I*, Moskva.
1965　*Grammatika nivxskogo jazyka II*, Moskva.

Plural Suffix *-gun* in Poronaysk Dialect of the Nivkh Language

Itsuji TANGIKU
Center for Ainu & Indigenous Studies, Hokkaido University

Nivkh language has suffix *-gun* which shows accordance between verb and subject. TAKAHASHI Moritaka pointed out some examples of accordance between verb and object in Poronaysk dialect of the Nivkh language in his work of 1932. This head-marking tendency may be an influence from Sakhalin dialect of the Ainu language.